南九州地域科学研究所所報
第39号　（2023）　25～33頁

鹿児島の保育者養成校における保育実践力向上のための指導法の検討

―学内実習におけるエプロンシアターの製作・発表を中心に―

Examination of Teaching Methods for Improving Childcare Practical Skills at the Nursery Teacher Training Facilities in Kagoshima:
Focusing on the Presentation of the Apron-theater in the On-campus Substitute Training

藤川和也・中村礼香・金浦美咲
Kazunari Fujikawa, Ayaka Nakamura, Misaki Kanaura

鹿児島女子短期大学

幼稚園教諭教職課程および保育士養成課程を持つ保育者養成校において保育実践力の向上を図るための取り組みや指導法の充実・開発が求められている。一方で、近年、コロナ禍により学内実習を選択せざるを得ない状況も生まれている。そこで保育実習Ⅰ（保育所）における模擬保育の内容をエプロンシアターに統一して実践し、そのアンケート調査の結果を集計・考察することで、保育実践力向上を図る取り組みとして一定の効果があることが認められ、保育内容「言葉」や「表現」において「エプロンシアターの見本の実演や動画」「仕掛けのアドバイス」「演じ方」において連環を図ると良いといった指導法の充実・開発に向けた観点を導出した。

Key words：保育実習、保育内容の指導法、児童文化財、保育実践力
nursery practice, teaching methods for childcare content, children's cultural property, childcare practice

1．はじめに

現行の幼稚園教諭教職課程および保育士養成課程では、具体的な保育場面を想定し、領域の内容と指導法を一体的に学習する構成となっている[1)2)]。保育実践力の向上を図るために保育者養成校でも、保育実践力向上の取り組みや指導法の充実・開発が必要といえる。とりわけ保育内容に関する指導法科目に加えて、実習科目も担当する教員においては、両者の連環を企図することが求められるであろう。

また、近年では、コロナ禍により保育現場での実習の全日程または一部日程の実施が困難となり、学内実習等で代替せざるをえない状況も生まれている。

本学でも令和２年度の保育実習Ⅱの全日程、令和３年度の保育実習Ⅱの一部日程が、学内での対面による実習で代替することになった。そして、令和３年度は、保育実習Ⅰ（保育所）において、全日程または一部日程で保育現場での実施が困難となった学生がいたため、本学の学内実習委員会、学外実習委員会、学科会議で検討をした結果、学内実習で代替をすることになった。

これまでコロナ禍で実施してきた保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰ（保育所）、幼稚園実習Ⅰ・Ⅱに培った子どもたちとの経験を踏まえ、それぞれの学生が取り組みたいテーマで模擬保育に向けた指導計画案を作成し、実施した[3)4)]。

ただ保育実習Ⅰ（保育所）は、学生にとって初めての保育実習となる。講義や演習等で学びを積んできているが、保育場面を具体的に想定し、領域の内容や幼児の発達を踏まえた役割演技は困難さがあると判断し、模擬保育の内容を部分保育として発表形式で行えるエプロンシアターに統一して実践した。共通の土台を作ることで題材選定から製作・発表の過程や振り返りといった活動について、不安感を軽減するとともに、学びの内容への焦点化を図ることができ、学生相互の検討内容や活動の質において充実を図りたいと考えた。

近年のコロナ禍における学内実習で実施した先行研究としては、児玉・太田・井出・谷村・服部・山本による保育実習Ⅱにおける実践研究[5)]や、小林・佐藤による保育実習Ⅰ（保育所）または保育実習Ⅱにおける実践報告[6)]がある。これら先行研究ではいずれも模擬保育のねらい・内容は学

生により異なるものが設定され、模擬保育体験を通した保育者としての学びの内容が整理・考察されている。

一方で、エプロンシアターに関する先行研究としては、教育実習に取り入れた研究がある。中谷・浅野による研究では、全学生同一の作品を製作し、４歳児の前で実演した結果がまとめられている。演じた際の幼児の反応や演じてみての感想をもとに、教育実習においてエプロンシターを取り入れることの有効性について論じている[7)]。

また、小川による研究では、選択授業「お話の世界」の受講生を対象に、各学生が好きなテーマでエプロンシアターを製作し、それを実演した感想を元に演じ方について１～５段階の自己評価させたものを整理し、その結果をまとめている。いずれも教育実習を対象としたものであること、エプロンシアターの実演を中心とした論となっている。

そこで、本稿では、保育実習Ⅰ（保育所）における学生のアンケート結果を元に考察することで、エプロンシアターを取り入れて実施したことが保育実践力向上を図る取り組みとして効果があったのかを検証するとともに、さらに効果を高めるための指導の観点を得たい。

２．保育実習Ⅰ（保育所）におけるエプロンシアター製作・発表の実施計画について

２－１　実習の概要

令和３年度の保育実習Ⅰ（保育所）は、コロナウイルス感染症に関連する対応で、一部の学生が学内実習に切り替えて実施した。実習期間と日程、対象学生は以下の通りである。

・保育実習Ⅰ（保育所）

〈 学外実習 〉

期間：令和４年２月16日（水）～ ３月１日（火）

対象者：107名

〈 学内実習 〉

期間：令和４年２月16日（水）～ ３月３日（木）

※18・19日を除く

※事前オリエンテーション：２月10日（木）

対象者：76名―学内実習途中合流者３名を含む―

（うみ組・やま組の２クラスに分けて実施）

学内実習の内容を設定するに当たっては、厚生労働省による「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（平成30年４月27日付け子発0427第３号厚生労働省子ども家庭局長通知）」にある「保育実習実施基準」や、「教科目の教授内容」と本学「保育所実習Ⅰ」シラバスを踏まえた。

２－２　エプロンシアターの製作・発表の実施計画

（１）内容の構成

以下、エプロンシアターの製作・発表の構成を整理する。

①　エプロンシアターの提案

②　エプロンシアターの題材選定

③　エプロンシアターの略案作成

④　エプロンシアターの製作

⑤　エプロンシアターの教員チェック

⑥　エプロンシアターの練習

⑦　エプロンシアターの発表

⑧　エプロンシアターの作品鑑賞会

⑨　エプロンシアターの発表についてのグループ討議

（２）期間と時間数

・企画の期間（計約190分）

①令和４年２月10日（木）10分程度

②・③令和４年２月21日（月）90分×２コマ

・製作（発表準備）の期間（計990分＋自宅での製作）

④令和４年２月22日（木）～24日（木）90分×６コマ、

⑤令和４年２月25日（金）90分×２コマ

⑥令和４年２月26日（土）、28日（月）90分×３コマ、

・発表の期間（計270分）

⑦令和４年３月１日（火）、２日（水）90分×３コマ

・振り返りの期間（計180分）

⑧・⑨令和４年３月２日（水）90分×２コマ

・その他

課題の時間を活用している学生も一部見受けられた。

２－３　指導の実際

本稿では、企画の期間と製作（発表準備）の期間を中心に報告する。

（１）企画の期間における指導の概要

題材選定にあたり学内実習の事前オリエンテーションにおいて、エプロンシアターを実施することを伝え、見本の提示した後で、どのような作品を製作したいか考えておくことを伝えた。その後、実習開始後にエプロンシアターの略案として、①発表日、②題材名・題材元・対象年齢、③ねらい、④準備物及び個数、⑤おおまかな話の流れと製作物のイラスト、⑥指導の重点、配慮・留意点、準備物などを記載するワークシートを配布して活動に取り組ませた（資料①参照）。

活動途中での質問・相談・意見交換をする機会はそれぞれの組で自由におこなってよいこととした。教室には、実習担当教員が各組１名に加え、その時間の担当者として割り振られている学科教員が滞在し、質問・助言等をおこ

なった。

（２）製作（発表準備）の期間における指導の概要

教員により製作物チェックまでの時間は、そのほとんどが裁縫の時間として利用され、割り当てられた時間内で完成せずに自宅に持ち帰って作業をおこなう学生が多くみられた。

教員チェックも実習担当教員が各組１名に加え、その時間の担当者として割り振られている学科教員で分担しておこなった。エプロンシアターの製作進度の確認を中心に、発表に向けた工夫に関する助言や指導をおこなった。

発表準備に関しては、①題目、②お話の概要とポイント、③仕掛けや見どころ、工夫点、④登場人物と準備段階の配置（イラスト付き）、⑤脚本（ナレーション・セリフ・効果音、場面や登場人物の配置、動かし方）をまとめるワークシートを配布し取り組ませた（資料②・③参照）。

製作が順調に進んでいる学生は、製作物や脚本の手直しを行いながら取り組めていたが、製作が進んでいない学生は、製作物の完成、脚本の完成に向けて取り組む形となり、練習を踏まえての製作物の手直し、脚本の修正といった時間を確保できなかった。

３．エプロンシアターについて

エプロンシアターは、1979年に中谷真由美によって創案された児童文化財の１つである。胸当て式のエプロンにお話の背景を縫い付け、演じ手がポケットから人形を取り出してお話を演じるものである。中谷によると、エプロンシアターは、「人形劇」「演劇」「素話や語り」の三つの要素を合わせ持った独自の世界である[9)]。

中谷はまた、エプロンシアターの作り方や演じ方として次のように説明している[9)]。まず、お話の選び方についてである。特に初めて作る場合は登場人物が少なく、場面転換があまりないお話を選ぶことを勧めている。また仕掛けとして、①人形の裏表を使う、②黒い泡が白い泡になるといったように変化させる、③小さいポケットからびっくりするほど大きなものが飛び出すといったように意外なものが出てくる、という３つの内容を挙げ、物語に合わせて仕掛けを有効に使い、子どもたちのイメージの世界を膨らませるように述べている。演じる際は、直立不動で演じるものでは無く、演じ手がエプロンをつけたまま動けるという効果を最大限にいかして、自由に人形を操作しながら、舞台を広げていくようにする。

さらに、中谷はエプロンシアターが子どもの心をとらえる要因として次の３つを挙げている[9)]。１つ目は、演じ手の顔がいつも間近に見えるので、子どもたちに安心感を与えることができ、演じ手にとっては子どもと対面することで子どもの反応を見ながら臨機応変にお話を盛り上げることができるという点である。２つ目は単に見せるだけでなく、また見るだけでなく、演じ手と子どもたちがやりとりをしたり、一緒に歌ったりするなど、子どもたち自身がお話の中に積極的に参加することができるという点である。３つ目は、エプロンシアターの素材が布でできているため、布がもっている温かさや柔らかさなどの材質感が子どもに好まれるという点である。

エプロンシアターは一人で演じるということも、保育者にとっては取り組みやすい点だと思われる。学生たちが実習中に、誕生日会での出し物やお別れ会での出し物を課題として出されることも多く、エプロンシアターを製作することで今後の他の実習や、就職してからも活用できるため、学内実習においてエプロンシアターの製作に取り組むこととした。

４．質問紙調査による部分保育エプロンシアターの検証

本章では、実習後に行った『部分保育「エプロンシアター」のふりかえりアンケート』を元に、エプロンシアター製作や発表に取り組んだ学生たちにとってどのような学びがあったのかを検証した。

４－１　質問紙調査の目的

学内実習において、部分保育としてエプロンシアター製作とグループに分かれて人前での発表を行った。学生たちにとっては、エプロンシアターを製作することも、演じることも初めてのことであった。エプロンシアターを製作する際には、お話選びや台本作成、場面転換や仕掛けなどについての検討など多くの過程が存在する。また、発表するためには練習が必要であり、動かし方を考え、台本を覚え、子どもたちを惹きつけるための工夫をしなければならない。こういった経験を通して、学生たちにとってどのような学びがあったのかについての調査を行った。

４－２　質問紙調査対象及び調査時期

調査対象者は令和３年度に保育実習Ⅱで学内実習となった76名である。学内実習終了後の令和４年３月に質問紙調査を行い、71名（回収率93.4％）からの回答が得られた。質問紙には、研究として結果を使用すること、不使用による学業等への不利益を被ることはないこと、個人が特定されるものではないことを記載し、対象者から同意を得た。

４－３　質問項目

本稿においては、『部分保育「エプロンシアター」のふりかえりアンケートの中の６つの項目を取り上げ、分析を行った。今回の分析対象とした質問項目は以下の通りである。

質問（１）:「本科目の到達目標の１つに、『担当保育等を通して実践力を身に付ける』とあります。あなたはこの目標を達成できましたか？」

質問（３）:「題材は、何から選びましたか？」

質問（６）:「部分保育『エプロンシアター』の取り組みの中で、『苦労したこと』を下記の中から３つ選び、順位を付け、そのように思う理由を書いてください。」

質問（７）:「部分保育『エプロンシアター』の取り組みの中で、『必要性を感じたもの』を下記の中から３つ選び、順位を付け、そのように思う理由を書いてください。」

質問（８）:「部分保育『エプロンシアター』の取り組みの中で、教員による指導で、もっとあるとよいと思う内容を書いてください。」

質問（10）:「『エプロンシアター』に取り組むにあたり、どのような力が必要だと思いますか？」

回答方法は、質問（１）は「とても達成できた」「まあまあ達成できた」「達成できた」「達成できなかった」「どちらともいえない」の５つの中から１つを選択、質問（３）は「絵本」「幼児曲」「手遊び」「その他」の４つの中から選択、質問（６）、（７）は当てはまる項目に順番を付け、自由記述にて理由を述べる形式、質問（８）、（10）は自由記述とした。

５．調査結果

５－１　保育の実践力について

質問（１）:「本科目の到達目標の１つに、『担当保育等を通して実践力を身に付ける』とあります。あなたはこの目標を達成できましたか？」という質問に対し、回答の結果は「とても達成できた」16名（22.5％）、「まあまあ達成できた」35名（49.3％）、「達成できた」19名（26.8％）、「達成できなかった」１名（1.4％）、「どちらともいえない」０名（０％）となった（図１）。この結果から70名（98.6％）は実践力が身に付いたと感じていることがわかる。

５－２　エプロンシアターの題材について

質問（３）:「題材は、何から選びましたか？」という質問に対し、「絵本」49名（69.0％）、「幼児曲」14名（19.7％）、「手遊び」５名（7.0％）、「その他」３名（4.2％）となった。「その他」を選んだ学生は、YouTube やエプロンシアターの本を参考にしたり、オリジナルでストーリーを考えたりしていた。この結果から絵本を題材としてエプロンシアターを考えた学生が多かったことがわかる。

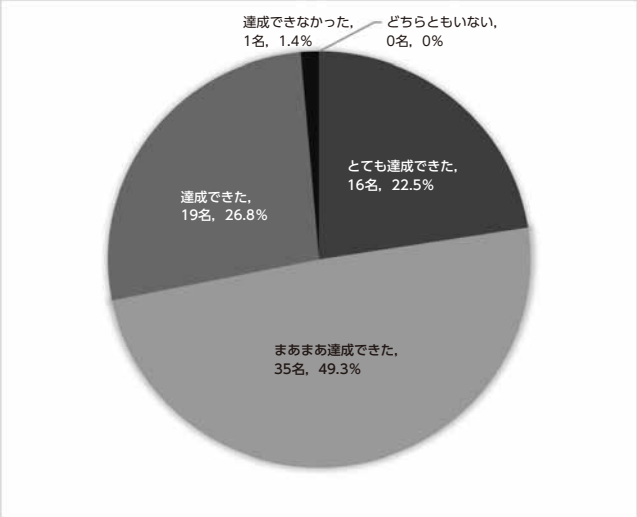

図１．質問（１）:「本科目の到達目標の１つに、『担当保育等を通して実践力を身に付ける』とあります。あなたはこの目標を達成できましたか？」に対する回答

「絵本」を題材にした学生は、「ブレーメンの音楽隊」、「赤ずきんちゃん」、「おおかみと七ひきのこやぎ」といったグリム童話や、「さるかに合戦」、「うさぎとかめ」「ももたろう」といった日本昔話、「はらぺこあおむし」や「ぐりとぐら」「くろくんとちいさいしろくん」といった絵本から選んでおり、それぞれに仕掛けを用いてお話の世界を作っていた。

「幼児曲」を題材にした学生は、「ふしぎなポケット」、「どんないろがすき」、「おもちゃのチャチャチャ」、「ジャングルポケット」「コンコンクシャン」といった曲を用いていた。

そして「手遊び」を題材にした学生は、「三匹のこぶた」「カレーライスのうた」「くいしんぼうのゴリラ」「キャベツの中から」といった曲を用いていた。

題材選定をする中で、その物語や歌を通じて子どもたちに伝えたいねらいを考え、それが伝わるように台本を作るということを指導して、エプロンシアターに取り組んだ。

５－３　エプロンシアターの取り組みにおいて苦労したことについて

質問（６）:「部分保育『エプロンシアター』の取り組みの中で、『苦労したこと』を下記の中から３つ選び、順位を付け、そのように思う理由を書いてください。」という質問に対し、用意した選択肢は、「題材選定」、「略案作成」、

「エプロン製作」、「台本作成」、「仲間との相談」、「教員による助言、チェックを受けての改善」、「発表」、「グループ討議」、「２クラスでの作品鑑賞」、「略案や脚本の修正や振り返りの記述」、「その他」の11項目とした。その結果を表１に示す。結果は、各項目の順位の人数を示し、さらに１位を３点、２位を２点、３位を１点として点数化した合計点を示している。

人数で見ると、総合的に最も苦労したと感じたことは、「エプロン製作」63名（88.7％）、次いで「発表」51名（71.8％）、３位が「題材選定」37名（52.1％）であった。一方、点数化した結果の１位は「エプロン製作」167点、次いで「発表」94点、３位が「台本作成」64点となり、エプロン製作が突出して苦労したと感じていることがわかる。また、合計の人数としては「題材選定」に苦労したと感じた学生が多かったが、「台本作成」を苦労したと１位、２位に挙げている学生が多く、発表の準備から発表にかけての行程が学生たちにとって苦労したと感じたようである。

エプロン製作に苦労したと感じた理由として、「裁縫が苦手」「作るものが沢山あり時間がかかった」「仕掛けや表情を作ることが難しかった」といったことが挙げられた。発表に苦労したと感じた理由として、「子どもの反応に対して臨機応変に対応することが難しかった」「緊張して台本通りにできなかったり、セリフを忘れたり、貼るところを間違えたりした」「子どもたちが楽しめるようにどうすれば良いか考えるのが難しかった」といったことが挙げられた。題材選定に苦労したと感じた理由として、「対象年齢に合ったテーマを選ぶことが難しかった」「子どもが参加して楽しめるものを探すのが難しかった」「子どもに見てもらいたいものが何かと考えるのが難しかった」「エプロンシアターとしての面白さを出す題材を選ぶのが難しかった」「エプロンの色を先に選んだため、その色にあった題材を選ぼうと考えたら難しかった」「人と被らないものを選ぶのが難しかった」といったことが挙げられた。

自分の作りやすさを考えるだけでなく、子どもの立場に立って題材選定を行い、製作を工夫し、発表した学生が多いことが自由記述から読み取れた。

５－４　エプロンシアターの取り組みにおいて必要性を感じたことについて

質問（７）:「部分保育『エプロンシアター』の取り組みの中で、『必要性を感じたもの』を下記の中から３つ選び、順位を付け、そのように思う理由を書いてください。」という質問に対し、用意した選択肢は質問（６）と同じである。その結果を表２に示す。結果は、質問（６）の結果と同じように、各項目の順位の人数を示し、さらに１位を３点、２位を２点、３位を１点として点数化した合計点を示している。

表１　エプロンシアターの取り組みで苦労したこと

	１位（人）	２位（人）	３位（人）	合計（人）	合計（点）
エプロン製作	46	12	5	63	167
発表	11	21	19	51	94
題材選定	2	13	22	37	54
台本作成	7	15	13	35	64
教員による助言、チェックを受けての改善	2	4	1	7	15
略案作成	0	2	3	5	7
２クラスでの作品鑑賞会	0	1	3	4	5
略案や脚本の修正や振り返りの記述	1	1	2	4	7
グループ討議	1	2	0	3	7
その他	0	0	2	2	2
仲間との相談	1	0	0	1	3
未回答	0	0	1	1	1

人数で見ると、総合的に最も必要性を感じたものは、「エプロン製作」と「発表」が同数で33名（46.5％）、次いで「教員による助言、チェックを受けての改善」31名（43.7％）であった。一方、点数化した結果の１位は「エプロン製作」70点、次いで「発表」69点、３位が「教員による助言、チェックを受けての改善」58点となり、１点であるが、「エプロン製作」が「発表」を上回った。

エプロン製作を必要だと感じた理由として、「子どもがエプロンを見ながら話を聞くため、丁寧に作ることが必要だと思った」「今後実習や保育で使えるものを作れたことが良かった」「エプロンシアターをオリジナルで作ることで達成感を感じることができた」といったことが挙げられた。発表を必要と感じた理由として、「緊張の中で発表するという経験が必要だと思った」「他の作品を見ることで、工夫点や仕掛けを知り、自分の改善点を見つけることに繋がった」「子どもの立場を体験することができる」といったことが挙げられた。教員による助言、チェックを受けての改善を必要だと感じた理由は、「自分では思いつかないアドバイスをもらうことができ、改善することができた」「エプロンシアターを実際に演じたことのある先生から的確な意見をもらうことができた」といったことが挙げられた。

将来を見通して、発表の場を良い経験と捉えた学生が多

く、また他人の意見を元に改善したいという意欲がある学生が多かった。

表２　エプロンシアターの取り組みで必要性を感じたこと

	１位（人）	２位（人）	３位（人）	合計（人）	合計（点）
エプロン製作	12	13	8	33	70
発表	14	8	11	33	69
教員による助言、チェックを受けての改善	7	13	11	31	58
台本作成	9	9	11	29	56
題材選定	12	6	4	22	52
グループ討議	3	6	6	15	27
２クラスでの作品鑑賞会	5	5	5	15	30
略案作成	4	3	6	13	24
略案や脚本の修正や振り返りの記述	2	3	7	12	19
仲間との相談	3	4	2	9	19
その他	0	1	0	1	2

５－５　エプロンシアター発表までの過程における教員の指導に求めることについて

質問（８）:「部分保育『エプロンシアター』の取り組みの中で、教員による指導で、もっとあるとよいと思う内容を書いてください。」という質問に対し、自由記述で回答してもらった。類似した回答をグループ分けした結果が表３である。

「エプロンシアターの見本の実演や動画を見たかった」と「仕掛けのアドバイスが欲しかった」がそれぞれ６名の同数で最も多い回答であった。次いで、「相談する時間がもっと多く欲しかった」、「エプロンシアターに適した題材かわからなかったため、題材選びの際のアドバイスが欲しかった」といった意見もそれぞれ５名ずつ見られた。

学生たちにはエプロンシアターの既製品の実物を見せ、それぞれにどのような仕掛けがあるかの説明は行ったが、これまでに実際に演じるところは見たことがない学生がほとんどであったため、実演したり動画で見せたりしていれば、もう少し学生たちもエプロンシアターに取り組みやすかったかもしれない。また、児童文化財それぞれの特徴があり、お話によってどの児童文化財で表現するかの選択は大切なことであるが、教員による説明でそこまで詳しく述べておらず、また学生たちも児童文化財を作ったり演じたりという経験が初めてで、その点まで考えることが無く、製作途中でこの題材はエプロンシアター向きではないと気付いた学生もいたようである。題材選定の時点でそのような説明をするべきであったことは教員側の反省点の１つである。

また、製作がほとんど終わってから教員による製作物の確認とアドバイスを行う時間を取ったが、もう少し途中で相談する時間が欲しかったという意見や、演じる練習をしているときに、演じ方や導入に関するアドバイスが欲しかったという意見も見られた。

表３　教員の指導に求めること

内容	人数
エプロンシアターの見本の実演や動画	6
仕掛けのアドバイス	6
相談する時間	5
エプロンシアターの題材選びのアドバイス	5
製作のアドバイス	4
導入の指導	3
援助や言葉かけ	2
子どもの立場に立ったアドバイス	2
演じ方	2
台本の確認	1
子どもが楽しんでくれる工夫についてのアドバイス	1
発表前の事前チェック	1
縫い方	1

５－６　エプロンシアターに取り組むにあたり必要な力について

質問（10）:「『エプロンシアター』に取り組むにあたり、どのような力が必要だと思いますか？」という質問には自由記述で回答してもらった。類似した回答をグループ分けした結果が表４である。

最も多かったのは、演じる際の「表現力・演技力・言葉かけ」であった。そして２番目に多かったのが製作する際の「裁縫力・製作力」である。「練習」や「計画性」といった、製作するまでの過程や、演じるまでの過程の大切さを感じた学生も多かったようである。

表４　エプロンシアターに取り組むにあたり、必要な力

キーワード	人数
表現力・演技力・言葉かけ	24
裁縫力・製作力	18
集中力	13
イメージ力・想像力	13
発想力・創造力・アイデア・工夫	11

練習	7
計画性	7
導入	5
忍耐力	5
自信	4
楽しむ力	4
コミュニケーション能力	3
度胸	3
観察力	2

写真１　学生の発表の様子①

写真２　学生の発表の様子②

６．考察

調査結果を見てみると、学生たちはエプロンシアター製作や発表を通して、模擬保育であっても、子どもたちにどうしたら喜んでもらえる仕掛けにできるか、子どもに作品を通して伝えたいことは何か、子どもたちとコミュニケーションを取りながら発表をするためにはどうしたら良いか、人の作品を見たり他人からアドバイスをもらっていたりすることでより良いものに改善したいといったことを考えて実習に取り組んだことがわかった。

質問紙調査の（１）の質問で、保育実践力が身に付いたと考えた学生が98.6％いたが、子どもの立場と保育者の立場と両方の視点から考えることができたと感じたことから、このような結果になったのだと言える。

この度の実践から導出した、今後の指導法の充実に向けた観点として考えられるものとして、保育内容「言葉」や「表現」に関連して取り上げる。

エプロンシアター発表までの過程において学生が教員の指導に求めることについて、５領域のうち「言葉」や「表現」に関連しているのは「エプロンシアターの見本の実演や動画」「仕掛けのアドバイス」「演じ方」が挙げられる。今回の学内実習は初めての保育所での実習でもあり、エプロンシアターがどのようなものか、題材を決める前にイメージすることが難しい学生が多かったようである。保育内容「言葉」に関わる授業の中で、児童文化財を取り上げる際に、エプロンシアターでの製作・表現活動を含めた作品の鑑賞や分析をしたり、エプロンシアターの動画を見て表現方法による違いを比較したりする時間を作ることが必要だと改めて感じた。また、題材に沿った仕掛けの作成や演じ方についても指導が必要である。これに関しては「表現」に関わる授業において指導が可能である。どのようなエプロンシアターの演じ方をすれば子どもたちに題材やイメージが伝わるのかを想像し、動きや仕掛けの動かし方が単調にならないようにメリハリをつけた演じ方の指導があればよいと考える。またエプロンシアターの仕掛けを含む、手や身体の動かし方、空間の使い方についても授業で取り扱う必要がある。そのためにはまず、授業内で何かになりきったり、自分のイメージを伝えたりする際、存分に自分の表現ができる環境を作ることが大切である。互いの良さを認め合える環境の中で、発表したり演じたりすることのできる機会を作っていきたい。このような保育内容「言葉」や「表現」の授業内での指導によって、学生がエプロンシアターに取り組むにあたり必要な力と回答している言葉かけ、表現力、演技力の向上がみられるのではないかと考える。

７．引用文献

１）文部科学省（2017）「教職課程コアカリキュラム」、https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf
２）厚生労働省（2017）「保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）［報告書］」、

https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000189068.html
3）丸田愛子・中村礼香・藤川和也・宇都弘美（2021）「保育実践力向上のための指導法の検討―指導計画案作成に関するアンケート調査から―」、志學館大学教職センター紀要第６号、pp.3–13.
4）藤川和也・中村礼香・丸田愛子・宇都弘美（2022）「鹿児島の保育者養成校における模擬保育の実践考察」、鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所第38号、pp.43–50.
5）児玉珠美・太田美鈴・井出裕子・谷村和秀・服部壮一郎・山本辰典（2021）「学内保育実習のあり方に関する実践研究」、愛知学泉大学紀要第３巻第２号、pp.147–155.
6）小林小夜子・佐藤有子（2022）「保育士養成課程におけるコロナ禍での保育実習Ⅰ（保育所）および保育実習Ⅱの取り組み」、福山市立大学教育学部研究紀要 Vol.18, pp.35–48.
7）中谷真弓・浅野みなみ（1995）「109 教育実習におけるエプロンシアターの研究」、日本保育学会大会研究論文集、pp.218–219.
8）小川圭子（2011）「保育者養成における実践力の育成についての研究－エプロンシアターの振り返りを中心に－」、幼年児童教育研究第23号、pp.41–46.
9）中谷真弓（2022）「お話の世界に誘うエプロンシアター―エプロンシアターの概要と活用―」、図書館雑誌第96巻、pp.547–549.

（2022年12月22日　受領／2023年１月12日　受理）

(資料①：エプロンシアター略案)

エプロンシアター略案

発表日	月　日（　）	学生名	氏名	組　番	
題材名	（絵本・幼児曲）（　歳児対象）				
ねらい 2つ程度					
準備物及び個数					
時間		おおまかな話の流れ 製作物のイラストなど		指導の重点、配慮・留意点、準備物など	
評価	自己評価（A B C D） ●年齢・発達にふさわしい活動か（　） ●教材の選択は適切か（　） ●活動のねらいは達成できたか（　） ●総合評価（　）				

（資料②：エプロンシアター脚本－表－）

組　　ホーム　　番　氏名
（学籍番号　　）

題目	
【お話の概要とポイント】	
【仕掛けや見どころ、工夫点】	
登場人物と準備　＊登場人物とどのようにポケットに入れるかを書きましょう	

（資料③：エプロンシアター脚本－裏－）

ナレーション・セリフ・効果音	場面や登場人物の配置	動かし方